ウマの魅力

動物応用科学科 3 年　杉浦義文

ウマは特別な魅力を持っていると感じる。特にサラブレッドは人が創り出した最高の芸術品と呼ばれているように、美しく力強い。ウマはイヌやネコなどのペットと違い“乗る”ということができ、彼らに跨り、風を切って走っているときは何とも言えない爽快感を味わうことができる。

先日、そんなウマ好きの私に打ってつけのアルバイトを見つけてしまった。ある幼稚園の園長先生がウマを飼っているので、簡単なお世話をするというものであった。私はどんなウマがいるかと胸を躍らせながらアルバイト先へ向かった。個人的に飼っているということだから、サラブレッドのような大きいものではないだろうなぁ、まあ乗れればいいかと勝手にイメージを膨らませていた。しかし、バイト先にいたのは体高が 80cm にも満たない 4 頭のポニーだった。とても私が乗れる大きさではない。ウマは乗ってこそと思っていただけに正直ショックであった。

私は小さなポニーでもウマはウマだと割り切って仕事を始めることにした。普段はおとなしい大学のウマを扱っているだけに、やんちゃなそのウマたちにはかなり手こずる。ブラッシングをしようとしてもあっちへこっちへ動きまわり、挙句の果てに、私の足の指を踏みつける。掃除をしているときは、愛想良く近づいてきたかと思うと人の尻をパクリ。ウマは怒られるのを察してダッシュで逃げるのだが、しばらくするとまた尻をパクリ→ダッシュの繰り返し。またあるときは、散歩中に突然走り出して、大の大人が引きずられるということもあった。小さくてもウマはウマだとこのとき切に感じた。

ただ、大変なことばかりではなく、最近は彼らも心を開いてきてくれているようだ。その日はいつになく馬体が汚かったので入念にブラッシングをしていると、いつもは落ち着かないウマがじーっと大きな瞳でこちらを見ている。私はまたいたずらでも考えているのか？と思いながらブラッシングを続けていた。しばらくするとその子は私の肩を唇で優しくなでてくれた。ウマは仲間同士で唇を使ってお互いグルーミングをする。その行為を人間の私にもやってくれたのだろうか。そんなことを思いながらヒトとウマとが互いにグルーミングをし合う。

人間の勝手な想像かもしれないが、このとき仲間として受け入れてもらえたような気がして非常にうれしかった。乗馬だけではなく新しいウマの魅力を感じた瞬間だった。